●本誌は世界主義を標榜して婦人解放を主眼とす

世界婦人

本號目次

△家庭制度の犧牲　安部磯雄
△讀書の嗜好（承前）　赤司繁太郎
△薄倖の婦人　赤羽巖穴
△悲哀の音　女學生
△新紀元晩餐會（附其由來）　小野吉勝
△旅行中の色々（一）　ひで
△人の子　渡邊博
△求妻の八景　菊池松堂
△悲戀　深水
△短篇小說親友　増田操
△海外時事
△海內時事

家庭制度の犧牲

安部磯雄

家庭は個人の幸福を來すために必要なる條件ではありますが、若し家庭の爲に個人の幸福をも犧牲に供せねばならぬといふことがありますならば、私は斷然家庭無用論を唱へます。私は最早家庭に對して何等の義務あるものと思ひません。家庭は個人の爲に存在して居るので、個人は家庭の爲に生きて居るのではありません。今日の年若き男女が結婚問題に觸れると忽ち家族制度といふ壓迫に逢ふのです。家族制度と申せばいかにも體裁が善い樣ですが、實を言へば頑固なる兩親が家といふことを口實にして自分の我儘を貫かんとするのです。概して一家內で新舊思想の衝突がある時には、世間は思ひ切つて老人達の心得違を攻擊する程の勇氣に乏しいのでありますから、彼等は益増長して子女を犧牲にすることを何とも思ひません。私は近日耳にしたる事實を擧げて、家族制度といふ名の下に如何なる慘事が行はれつゝあるかを陳べましよう。某富豪の家に十八九歲の娘があります。其娘の姉に養子をしたのでありますが、其姉が先日死んだのであります。養子は分家して齡も既に四十を超へ、子供も數人あるのに、養父は彼の後妻として妹娘を與へんと言ひ出したのです。全體此養子といふのは働きのない意氣地なしですから、十八九歲の娘がどうして喜んで嫁する譯がありましよう。彼は父から始めて之を聽きました時には殆んど二三日も絕食して悲んだのです。然しこれが爲め父の考へは少しも動きません。何故に父は可愛い娘をも苦めて斯の如き無理なことをするのであるかといへば、其動機はお話にもならぬ樣なつまらない事なのです。養子は既に分家して居るのですから早晩彼には相當の財產を頒けてやらねばなりません。若し娘が生きて居れば何の差支もないですが、若し此養子が全く他人から後妻を迎ふる樣になれば、夫婦とも養父から見れば血緣のなき他人ですから、彼等に數萬の財產を讓るのが誠に惜くてたまらないのです。其所で此僅かの身代の爲に否でも應でも娘を後妻に入れようとするのであつて、娘は全く犧牲といふ金の爲に將來望みのない人を自分の夫とせねばならぬといふのです。彼は今飽くまでも父の言ふことに反抗して居りますが、若し父が尚ほ壓迫すれば彼は自殺するより外ないと言ふて居るそうです

私は斯の如き事實を見る時には家庭といふものを咀ひたくなります。人があつての家人があつての財產ではありませんか。若し個人の幸福を足下に蹂躙して顧みないといふならば、家庭が何ですか、財產が何ですか、斯くても尚ほ日本の道德は父母の命に服從せねばならぬことを强ゆるのでしようか。私は決して家族制度を全然無視するのではありません。若し一個人の幸福と家庭の幸福とを調和させて行くことが出來ればこれで家庭の目的も達せられたものと思ふのです。人は主であつて家は客であります此主客の位地が顚倒する爲に思はぬ慘事が生ずるのではありませんか。然らば如何にして此誤れる思想を速に撲滅することが出來ませうか。第一には若き男女が斷乎として舊思想に反抗すること。第二には世間が前に陳べたる如き家庭の慘事に對しては遠慮なく老父の處置を非難することの外に良き方法はないと思ひます

悲哀の音

女學生

『姉さん――でもあまり殘酷ではありませんか』と、後はもう青白い親指をかみしめて深く吐息をついてる。これが一人の妹なので。十六にしてはあまりに其ヘッドが發達してるので時にはすごいと思ふ樣な事もある。いづくからともなくゆるやかに流るゝ秋の氣は、あたりに滿ちて痛手になやめる二人の胸に淋しうも吹きよせるあく知らじか此悲哀の音を。聞け寂寥の秋の聲を。夕流れて寒き秋水に倒れし影を寫しつゝ、夕風冷たき土橋の許に、思ひ〳〵の空想に耽ける。

『悔しい、情ない、姉さん死んぢまつた方がよつぽどましよ。私行く事は厭です。どうしても厭やです。姉さんどう思つて下さるの』と、もう涙にまぶたをうるほしてゐる。自分は唯ア、こばかりに可愛い妹のひへたる手をにぎりしめて、むせび返る涙を覆へば襟許にさむき夕風のおとなひて、いと〳〵すごく。

『姉さん、どうして世の中はこんなに變るのです。なぜこんなにすごい情ない事ばかりなのです。私どうして生れて來たでせう姉さん生れなかつた方がよかつたわ』と、又泣き入る。

『靜さんそれはお前が堪えられ無い樣に思ふのも無理は無い、まだ若いんだから。姉さんだつて學校に居る時は苦痛を受ける度に、それを無上の苦痛と思つて、いや煩悶だの人生だのとさわぎ立て、先生にむづかしい顔ばかりせられてゐたが靜さん其の時の苦しみ今思へば馬鹿らしいの、學生時代の苦痛――そは誠にやさしい者です、ほゝえみ高き机上にて想像する世の中は、いくら何と云つても、まだ〳〵やさしいのよ、靜さんは世の中はすごい、情無いと云ふがまだお前は其ほんとのすごさ、情なさを知らないでせう。そう云ふとおこるかも知れないけれど、今お前にふりかゝつてゐる事柄ねー、あれは姉さんの目から見れば何もそう生死をわける程の問題とも思はれないそうお前の樣に絕命の位置に立たなくつていゝと思ふがねー。人間は自分自心で其運命をきりぬいて行くのが一ばん豪らいのだから、世の中はまだもつと〳〵復雜で、混亂で、悲しい事が多いのだから、自己の運命は自己できり開いて見せると云ふ元氣と自覺がなくては駄目だよ。それしきの事に青い顔しよつてどうするか、お前若し姉さんの樣ないきなりになつたら、どうしますか』と一生懸命力を入れて說明したので後はもう息切々。あたりは暮れかゝつて來た。妹は無言でうつむいて泣いてる。凡てがませて居るので、いつも快活に樂しい事ばかり話し合つてゐた妹に、こんな世間染みた樣な事を話しはしたもの、丁解されたかどうかと心の内はうやむやさする。けれど思へばほんに、自分等二人は哀れなる孤兒よりもおとつてゐるではないか。不平と厭世と煩悶とにむなしく頭をうなだれてゐるとは果して誰れが用ふる言葉であらうか。

今春女學校を卒へていまだか弱き音の切々なるに父は日頃病みゐし病の變じて狂人となり果てたのである。妹は同じ學校の二年に行つてゐるのに多くもあらぬ財產はそれがため日一日と減るのみにて、今は借財に云々と云はなければならない樣になつたので、妹を學校からひかせよ、そして或家に養女にやれよと親族からの注告なので、母も詮方なく涙と共に今夕妹に說かれたのである。今丁度二年と云へば頭もはやかたまりかけて、これからが、ほんとに學問して力がつくのだと思へば、どうかして、せめて女學校だけなりとすませてやりたいと思ふけれど、今の今となつて誰に話し合ふ事も出來ず、増して今は自分々々の身のしよちに因つて毎日迷ひの眼を閉ぢてゐる程であるから、狂ひ、叫び、沈み、果ては痛手にきづゝきし我ヘッドは無上の悲哀に泣きくやれてゐる彼れ妹に對して何等の光をも與へない事を悲しむであらう。あたりはもうほの暗く稲子のとび行くもいと淡くして、ふみいおのゝく妹が手につみとられし名なし草は、無心の水面にうつろひて、彼方の森蔭にはあかき光りのちら〳〵さ。

雲のうへも涙にくるゝ秋の月
　いかで澄むらむ淺茅生の宿

いときなき初元結に長き世を
　ちぎる心はむすびこめつや

●女子大に讀むべく男子盛んに讀まざる可からず

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

海外時事

獨逸の婦人運動

▲獨逸の社會主義婦人團隊が、エーゼンに於ける社會民主同盟に報告せし昨年の成績報告を見るに、同團隊の昨年に於ける發展は非常なるものなり、同年中、政府側の一部に於て法律上勞働組合の許可せらるゝ以上は、右組合外に、別に婦人團隊を許可せざる法律を制定せんとするの意嚮ありしかば、婦人團隊は是に對して極力反對運動を試み遂に同案を否決せしむるまでに至れり尚同年中政府案たる食物税問題に對しても此團隊は熱心なる反對運動を試みたりと。

▲ハノーバーに於ける婦人教育同盟は目下八百名の會員を有せりと云ふ。

▲婦人勞働者組合の組織は最も困難なるものなり、されど此運動も今や着々として成功せり、ターレムベルヒに於て、マンハイムに於て、伯林に於て、其他ミユーニクヒ、ライプチツヒ、ブレメン、ケーニヒスベンヒ、ヘンブルヒ、バウト、フランクフルト、エナ、コローン等の各都市に於て漸次組織せらるゝに至れり、現にコローンの婦人勞働者組合は五十の會員を有し、ヘンブルヒ市に於ける組合は二千の會員を有す、其他スーレムブルヒ、ブレーメンも亦同様なり是等組合は主として、小兒ある婦人及一般小兒の保護及農業勞働に從事せる婦人の教育、男女成年者の選擧權獲得に就て運動せり。

▲獨逸に於ける婦人運動の障礙は、婦人が政治的結社に加入する能はざること其主因たり、されば彼等婦人にして結社せんとするも、前記の事情のために解散せらるゝこと往々なり、然れども尚ほ是等婦人勞働者は熱心に運動及結社に從事しつゝあり。

▲クラ、チエトキン女史に依り編輯せらるゝ社會主義週刊新聞「平等」は、其讀者四萬六千より七萬人に増加せり、同紙の本領とする處は、主として無智なる婦人勞働者を教育訓練するに在り、從て同紙は婦人組合より熱心に歡迎せられつゝあれり、本同紙の附錄として、多大の小冊子及チラシ類は一般に配布せられ居れりと。

海内時事

下田歌子女史

下田歌子女史は職を辭し給ひぬ。多年扶殖したる勢力も、得難き地位も一朝すて、芥土の如し、都下の新聞は之れが說をなし紛々乎として定まる所あらず、極度まで罵歌するものあれば、無下に誹謗するものもあり、吾れは異に其の實相に迷ふ。

素より吾れは、女史と其の主義を異にするが故に、徒らに誹謗するは吾れの能くせざるところ、人の痛苦悲哀、懊惱に最も厚き同情を致するは誠に我れ等が嘗に候はやや、まゝならぬ浮世、はげしき制裁ある此の世にながらへて、わくまで己のが主義主張を立てんてさはかたしわさましの世や、人の心から出づる叫びは聞かれで、はかなき形の上のみの影に眼をくるゝ世には候、得では能く堪へ給ひける女史も、今ぞ終に立ち給ひぬ、身につながる最多のわづらひ、人の苦るしき誹りをも顧みざる君こそなつかしき。

皇室の藩屛

前後二回を以て、八十四名の新華族と、卅七名の陞爵者とを生せり、幾萬の枯骨を滿洲に曝したるの結果と知る可し。

外債は僅少なり、貢租は微細なり、名譽ある血税は更に擴張せらる、野に飢平なく、民に菜色なし、天下泰平、御家繁盛、アゝ慶す可き哉。

傳染病流行

虎疫は朝鮮の各地と、福岡、山口、兵庫、大坂、大分の各地に流行を極め、腦脊髓膜炎は東京の各區に漸く勢を逞うせんとすと。

盲目なる動物學者が、只だ人類相互の競爭を說いて、戰爭を讃美しつゝある時、見よ劇烈なる生存競爭の實戰は、微細のバチルスによつて爲されたるに非ずや、堂々たる人類は此の競爭に敗れて、繼々として斃るゝと云ふに非ずや、吾人は信ず、生存競爭とは人類相鬪うの謂に非ず、人類が團結し、協同し、相互扶助して、他生物に打勝つの事也、然り、病魔バチルスを絶滅せしむるにある也と。

●海軍中將と一職工との爭

海軍中將伊東義五郎が橫須賀在任中、造船職工藤井陽一の妻お源と姦通し、爲めに夫陽一等より脅迫を受けたりとの裁判事件は、橫濱地方裁判所に於て審理の結果被告陽一等は有罪の宣告を受けたり。

官威を以て縛し、金權を以て檢挫し、夫の職業に對する影響を以て、強き壓力として強て己の慾に從はしめたる、高位高官の行爲は何等の制裁を受る事なく、其の家庭に於てさへ、從順なる賢夫人は、夫の姦通事件を知るも、尙を婦德の堅固なるものありと稱せらるゝ、弱きもの、保護に對し、一介の職工は、其の妻を姦せられて更に尙を法律の名によりて罪せらるゝの屈辱を見る世をひがめる者に云へり「正しくとも、弱きもの、敗るゝが今の世の常也」と。

▲函館大町大澤嘉吉（十）は國元大火の報を聞き五圓の貯金を懐にして歸國せんとする途中、病氣の爲め貯金の總てを消費し且つ五日間も絶食せる爲め遂に橫濱戸部町掃部山の櫻樹に麻繩をつけて縊死せんとせしを人に認められて救助せらる、。

兄姉諸君よ、淋漓たる鮮血の中、既に斃れたると將に斃れんとして氣息只ならざる我等が同胞の、惡戰苦鬪を見給はずや、汚されて斃れたるものは彼等を忘れよ、吾人は決して彼等を忘れじ。

●社會の忘却兒

敗者の運命

情操健なる兄姉諸君、吾人は此所に世忘れ、人顧みず、新聞紙は僅に其の最少の活字を用ひ、或は僅に欄外の小部分を以て、如何にも面倒氣に報じつゝある、平々凡々にして、又殆んど毎日至る處に現じつゝ、ある事實を、特筆大書して披露せざる可からざる兄姉よ次の數項に注目せよ。

▲小兒餓死す　芝區愛宕下町二の二小泉壽一の長女おさん（四十二）は七月中より脚氣に罹りて稼ぎもならず私生兒貞次（二つ）を養ふ術なく新橋京橋邊を徘徊して人の情を受け辛うじて露の生命を繋ぎつゝありしが拾九日晚五日頃榮養不足の貞次を背負ふて日吉町の街路に佇み居りしが不憫や貞次は遂に餓死せしよりおさんは涙ながら芝署へ訴へ出たり

▲病人の自殺　十九日の夜十時五十六分橫濱發下り貨物列車が橫濱市西戸部町字小[illegible]を通行の際、年頃三十前後の地絣萬筋の單衣を着たる男、線路に飛込み頭部を挫きて死す、檢視の結果肺病を患ひ居たるものと判明せり

▲上野公園の縊死未遂　十八日夜九時頃上野公園[illegible]動物舍裏手の便所の梁に一人の男が細紐を掛け縊死を遂げんとせしを警官が發見して抱止め下谷署へ連れ行き取調べしに此者は下谷區根岸町二番地吉原豐吉（三十九）と呼ぶ者にて先頃まで同區東黑門町の旅人宿和泉館の通ひ番頭なりしが解雇され生活に困る處から主人の薄情を恨み自殺を企てし事を申立てしより懇々其の不心得を說諭の上女房お[illegible]を呼出して引渡されたりと

▲轢死女　廿日午後四時品川發赤羽行列車の爲に大崎停車場を距る一丁餘の處に於て廿三四の女工體の女が轢死を遂げたり

悲戀　溪水

ことに病み、熱にもだへて
狂ほしき妄哉
一つつく息のかすれも
二つ吐く息のほつれも
醒めはてぬ夢の名殘りか。

萬象の色も情も
うるみにし眼にはあやなし
雲かや空か、けぢめもわかず
星も光も、おぼろしとこそ。

美しき調べ、雜作も
鳴る耳はせんなし
ふと、つぶやきの聲もすがれて
おそろしき叫びのみ聞く。

身に觸るるもの皆、怪しくて
うつし心もなく生きながら
燃えたける胸の火に[illegible]み
ともすればたふれんとする。

打つふるう、總身のなげき
なぐさめはなき物思ひ
得てし恨みは化となし
口惜しさに涙ぞ溢れぬ。

わら、衾もふさがるくるしさや
執着つ恨みはとけず
冷たき涙に火の燄あて
恐ふせすれど物におびゆる。

理にはうからぬ、世をし云ふ
値なき浮世なる哉
やみがたき懊惱のこひを
我もやらで、死よりも暗へ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

讀書の嗜好（承前）

赤司繁太郎

是非人の知らねばならぬことが少なくとも三つある、第一はこの人類の住居たる、ホームたる驚ろくべき宇宙のことである、自然に關してゞある、義務教育年限内に於ける普通學を教授するのは或意味から申せばこの宇宙のいかなるものなるかを知らする所以である、科學の各分科に深く探り廣く究むるの要はないとしても少なくとも大躰のことに通ずるの必要はある、わが住む家の如何なるもの位かは誰しも家いものは知るの必要がある、私はいつも感じて居るのは普通の知識にてよいがあらゆる科學の各分科が其大意に於ていかなるものなるかを知りたいことである、普通學の大意に通ずることは此て常識を養ふの根底である、大なる常識の人、これが人類の中でも最も必要なる人なのである、大なる常識の發達せる人でこの世界が、此社會が組織さるゝに至つたならば實に人世は幸福であらうと思はれる、吾人は實に驚ろくべき自然と宇宙に圍繞されてをる、この自然の驚ろく〳〵の現象に對し一通りの知識を有することは人たるの任務には欠くべからざることなんである、自然既に然り、又人の社會を組成せる事情のことも自が住するホームを知るには必要である、これが多少にせよ政治のことや社會のことを知らねばならぬ理由である、これ等の知識は讀書によつて翫むることが出來るのである、この問題に關しては種々なる論點あれど先づ其大躰の意はこれで讀者に暗示することが出來たやうであるから次の點に移りましやう。

第二は己が職業のことである、これは實に重大なる問題である、職業を只假の腰掛主義で送つて居る人が世には少なくない、又職業を單に飯を食ふの方便としてをる人も亦尠なくない、其職業を誠の天職と考へてやつて居るものが幾何あるかと云へば實になさけないやうな感じがする位に日本人の職業に對する觀念が劣等である、成功、不成功など云ふことは差程大切な問題でないが、これが目下青年大多數の頭腦をなやまして居る。よし成功が最も大切なこととしてもその成功に先つて大切なることは其人が自分の職業を眞正に愛して居るかどうか眞面目に研究して居るかどうか、これを天職と心得て居るがどうかである、此頃は科學的研究法の進歩につれて如何なる方面の事業にも之れ相應の必要なる研究が積んで居る、若し吾人にして或る職業を執らんとするならば準備として必要な學課が必ず學ばれねばならぬ。最大多數の人は働きさへすれば進歩すると思つてをるらしい、然しこれは一大謬想である、吾人は働くならば正しき方向に向つて働かねば進むことは出來るものでない、正しき方向を知ることは必要である、若し正しき方向と其進むべき方法を知らんと思はゞ仲々一通りの勉强では六ケ敷のである、かくて初めて成功するにも讀書の必要なことが了解さるゝであらう。

第三は人生其ものを知ることである、人の人たる所は自己を知ることである、希臘の哲人が「己を知れ」と叫んだ辭は永久人の傾聽すべき言であらう、自己の運命を知らんとすることには種々の方面があるが少なくとも宗教道德上の修養に關することは最も必要な事柄である。

人が修養の方面のみから觀察しても信仰を有するのは必要なことである、信仰そのものは人たるの要素である、信仰なき人は人らしき人でない、何の爲めに信仰する、其信仰にはそれだけの理由がある、又信仰と申しても佛教の趣味あるもの基督教の趣味あるものがある、基督教にても自ら其屬する所が異ることもある、其の信仰は一なりとするも信仰に至る方面其人の氣根、境遇には必ず差異がある、これに關する知識は各自知るべきことではあるまいか。

宗教に宗派の必至的必要ありとは云はねど宗派は自らなる發達を有してをる、而して其信仰の傾向に差異ある以上は各自の傾向を同うする宗派はやがて吾人が信仰生活を發展せしむる上に非常な便利がある、然らば己が信仰の範圍遞遷たる宗教の發達や其現狀を知ることは必要ではないか、否各人の人格は即ち個性と同じ意味にも用ゆることが出來る、人格はやがて他と異なる修養の節だと云ふことも誤ではない、この人格の基礎たる信念に關する研究修養は亦讀書に負ふ所が尠なくないのである。斯く考へ來る時に讀書の嗜好の大切なる辯ずることは出來ないのである。

讀書の嗜好は單に娛樂と慰藉とに止まるものでない、亦單に時を費やす爲めでもないこれは人らしく男らしく女らしくなるための最も高尙なる、最も貴き義務なんである讀めよ諸君、冀はくは人生のために讀めよ總てのことゝしてこの人生の法庭に立たざるものはない。

薄倖の婦人

園大生

十月八日の郷信は、○○女史肺を病んで逝けりとの悲報を齎し來りぬ。秋雨淅瀝として窓を拍ち、感情綿々として盡き時、此の報を耳にして、余は夢かと計り驚きぬ。あゝ女史終に逝ける乎。

彼女は、余が小學校時代のクラスメイトなりき、彼女は怜悧にして俊敏なりき、彼女は豐肌玉の如く、艶麗花の如かりき、彼女は或る神官の一人娘と生れて父母の寵愛を一身に鍾めたりき。當時余は未だ鼻汁たらし小僧たるを免れざりし余は、別に戀と愛のと云ふ觀念は無かりしかとも、床し懷かしの情は余の小さき胸にも燃えたりし也。其の後風雨幾星霜、余は他鄕にさすらひの客となり、彼女は某女學校に入れりと人傳に聞けるのみ、爾來杳として彼女の消息を絶つと數年、偶々明治三十五年十一月、余が海を踏んで米國に渡らんとする前二日、故鄕の友人の談話に依り、始めて彼女の一家零落し、彼女は流寓して横濱に來り某小學校に教鞭を執り居れりと聽き、余は彼女を訪ふて其の數奇の運命を慰めんとせしも行李匆々終に果す得ざりき、太平洋の波路遙々米國に渡りてより後、余は故國の友の通信に依て、彼女は或る官人に愛せられて其の妻と爲りしと聽き、余は心竊に彼女が前途の祝福を祈りたりき、かくて余は倘ほ昨日迄も彼女は其の愛する良人と共伉儷睦じく、此の汚き浮世の一角に樂しき家庭を結び、あらんと思ひ居りたりしに、何ぞ圖らん。今や此の悲しき訃音に接せんとは、あゝ彼女終に逝ける乎。余は轟然として十五六年前の小學校生活の當時を想起し、花の如く美しかりし彼女の顏と露の如く潤かりし彼女の明眸とを眼前に思ひ浮べ而して終に佳人薄命の嘆を發せざるを得ざる也。

余は郷信に依て、現社會が如何に死せし彼女に惨酷なりしかを知りぬ、彼女は運命の神に見放されたり、彼女はあらゆる苦鬪を嘗めたり、あらゆる艱難と闘ひたり、あらゆる誘惑を拒絶せり、風霜雨露に其の玉の花顏を銷磨し盡せり彼女の不幸短命なる歷史は凄愴悲慘なる一幅の哀史にてありしなり、或る意味に於て彼女は今の社會より苛め殺されし也、喰人鬼に似たる今の社會の爲に苛め殺さるゝ者何ぞ獨り彼女に限らん、今の平民階級の多くは皆然らなり、然れども美にして艶、聰にして慧、天晴れ一個の佳人たるに於て恥しからぬ彼女にして猶は此事あるに到つては、余は實に天帝の無情を叫ばざるを得ざる也。

彼女は少にして慈母を失ひ、長じて一家零落に遭ひ、夫れより僅かに流寓し[illegible]夫子と約りぬ、中頃再び愛人を得て、[illegible]や、隣に赴かんとせしに、不幸不治の病を得て故郷に歸り、慈親の膝下に在つて靜養中終に起たず、一夜香魂渺緲として[illegible]にさまよひ行きぬ、天彼女に才貌を與へたる乎、抑も又彼女、薄倖の人に[illegible]ら孫の洲に赴きたる乎、[illegible]の一[illegible]に於て、彼女は如何に此の人生を觀じたらん、彼女は此の人生を祝福して逝きたる乎、將た此の人生を呪詛して逝きたりし乎、彼女の生は意氣より察して、余は其の後者なりしを信ぜんと欲する也。思ふに彼女解せんとする瞬間に於て、彼女の胸中には激烈なる社會革命の熱火燃えたりしならん。

彼女の薄倖悲慘なりし運命は、之れやがて女子社會の凡ての人々の運命にてある也、弱き者を呑滅するに急なる毒蛇の如き今の社會に、凡ての女子をして彼女の轍を踏ましめずんば已まざらんとする也。彼女は未成長の女子革命家にてありし也。天若し借すに壽を以てせしならば、彼女は恐らく女子革命軍の急先鋒たりしならん、聰明彼女の如き、氣概ある彼女の如き、到底現社會の腐敗と男子の壓迫に耐へ得べからざればなり。嗚呼花の如き容顏中に一種熱烈の志氣を含める彼女は終に逝ける也。未成長の女子革命家に實らずして一夜の狂風に散れる也余が彼女を弔するにや[illegible]これ今の社會の凡ての女子を弔する所以也。女史の靈よ、願くは天上より地上の魔[illegible]を呪へよ、余も又た地上に在りて此の奸惡なる社會を呪詛するを怠らざるべきぞ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

新紀元晩餐會

晩餐會十一月例會は其月の七日福田英子姉の宅に開かれた、當日は事の行違いより安部先生も見へられず、他の信友諸兄姉も多く不參であつた、逸見、柴田、大瀧の諸兄及び福田姉と私とで都合五名だつた。自ら淋びれがちなる晩餐會を北鐵道なる「平民農場」と、栃木縣下の『谷中村』問題とで議論に花を咲かした。

恰も此時、玄關で「郵便!」との頓狂聲、一座暫し話の先を折られた。さて見れば在栃木の田中翁よりの葉書であつた、曰く

苟くも政府ありとせば如何
日本臣民の住むべき地なく
爲に枕する處無之候、嗚呼
右御同志に可然御圖り相願度候
五日　古河町より正造

寸鐵人の肺腑を衝き、悲憤暗涙に咽ばしむ。一座互に顔を見合せて亦言なし。嗚、誰れか克く最後まで彼の哀むべき亡村の民を思ひ、之れが救濟に其老躯を提げ、身命を賭して盡粹せる我か田中翁を扶くるものぞ。

噫、新紀元の徒よ、數に於て、力に於て小なり、微なりと雖、我が翁を慰め、我が翁を勵ましむるもの爾を措きて將た何處にかある。（小野生）

新紀元晩餐會

其由來　小野吉勝

かゝなふれば既に二たとせの昔とはなりぬ。千九百五年秋十一月安部磯雄、木下尚江、石川三四郎の三兄相語らひ、月刊雜誌『新紀元』を創刊して盛んに基督の愛の敎を中心とせる社會主義を宣傳せられたりき。而して傳道に熱心なる諸氏の、いかで月一回の機關雜誌にて滿足せらるべき、やがて之れ毎日曜『新紀元說敎』の起因也。かく外に對して、稍活動の歩を進めたれども、内に向つて其基礎を省みれば既に聚しと雖、手を執り膝を交へて互に相寛話するの機會少きを憾みとしき。

さるを月の終りの日曜には安部先生の講話あるべく、其歸途必ず晩餐の卓を圍み膝寛ろげながら、其月の活働の狀況、さては將來の企畫、又は感話等興趣百出の好集會に、『新紀元社』を慕ひ來るもの未だ甚だ多からずと雖、孰れも新理想新信仰を堅く心に信じ憧る、一群の靑年男女なりき。

初め一二度は神田の常盤樓にて晩餐會を開きたれとも、之れ甚不經濟なればとて、是より角筈なる『新紀元社』にて開かるゝ事とはなりけり。

其消滅

斯くて互に慰め勵ましつゝ興趣深く裨益尠からざりし新紀元晩餐會は、滿一年を經て其第一の誕生日を迎へぬ、我等同人のよろこび如何ばかりなりしぞや、さるを好事魔多し、此時既に該兒の營養よろしからず、雜誌『新紀元』今や將に二歳の可愛兒たらんとして急に夭死し、其華々しかりし奮闘の面影を異變なる社會の人心に留めて遺骸を空しく逝く水の流轉の波に投じ去りぬるぞうたてかりける。

『新紀元社』の死滅は延いて其樂しかりし趣ありし晩餐會をも消滅に歸せしめたりき。噫、何等の痛恨ぞや。

逝くものは逝かしめよ、去るものは去らしめよ、時間と空間とを超越して、劫初以來『常に在』ませる大能の神は、復いつかは笑みて其死せるものに生命の息を吹き込み給ひて、活力を與へ給はん時なからでやは。されと、されと我等は時間と空間とに縛めらるゝ憐むべき人の子なり、涙脆く信仰衰へがちなる情の子なり、あゝ之れ弱き人情の常態、哀むべき情緒なり。されば我れ等新らしき理想と信仰とを渇望せる血を後進にとりて寔に之れ頼る方なき孤兒の哀感なりけるよ。

其再興

雜誌『新紀元』この世に光をおさめて以來未だ急かに之れが繼子を起たしむる能はず徒らに天を仰ぎ地に俯して我等が切なる願望の嘉納せられんことを只管祈りたりき。至誠は天に通ずとかや、時ありては空行く雲を睥睨して切齒扼腕、人を罵り世を嘲ることもあり、又は孤寥寂寞に堪えやらで神を恨み身を嘲つこともありしかと、猶其底に微かなれと打ち消しがたき協愛友情の靈光のあるればにや、神は愛に我等の切望を聽許せられ、再び晩餐會の再興を顯出せしめ給ひたりき。何等の祝福ぞや。

福田英子姉『世界婦人』を發刊主宰せらるゝや、又其寄稿家は多く元の『新紀元』同人なりき。之れ彼女も亦元の『新紀元社』の一人なりしのみならず、其『新紀元社』といふも『世界婦人社』といふも殆んと異名同體ともいふべき關係あれば也。

我等は寄ると觸はると常に彼の樂しかりし趣ありし晩餐會の再興を語りぬ、福田姉同より發する所、よつて一日事の序に安部先生を訪づれ、叩くに此事を以てしたりき。先生曰く

「『新紀元』晩餐會たふれてより相集る機會がないので私も何だか心寂しい感じがして居る所でした」と、茲に於て議早速纏り、再興の第一會を四月某日『世界婦人社』にて開きぬ。木下兄伊香保の山に籠りて出で給はず、一眼育ひたるが如きなきにあらずと雖未だ急に歎て悲しむべきに非ず我れらに安部先生のあるあり、この先生だに居まさば父以て心強かるべし、况んや石川兄のあるあり、田中翁も時々來會して其異彩至臧なる所あるをや。あゝ我れも亦多幸なるかな。

其經過及び將來の計畫

茲に再興成り、月一回の集會も滯りなく行はれしが、八月は地方に散ずるもの多ければとて一同休會し、九月以降從前の如く行ひ來れり。

さて從來は專ら親交を溫むる趣意に出で所感又は雜談に樂しき集會を保ちしかと、今秋以後は外に請ふて聖書の講義を聽き以て研究の步を進めんとの計畫あり、九月以來日の都合によりて未だ講義に着手せざれども、本月よりは必ず實行の運びに至るべし。我等は先生の厚誼を深謝すると共に天父の愛寵を感謝し奉る。

人生の惱みに疲れたる者、社會の不義を憤る者、神の愛を慕ふ者、人情の厚なるを求むる者は男女を問はず階級を論せず凡て我が晩餐會に列なるを得べし。但し晩餐の實費は各人の負擔なり。

人の子　渡邊博

雨は憂を呼び、風は淋しさを起す秋の一日であつた。爲す事もなき自分は、御飯も終り濟して書見をして居ると、午前の十時頃でもあらうか見知らぬ一人の少年がやゝ俯目勝になつて這入つて來た。見身には縞目も定かならぬ汚れた筒袖の單衣を着て紋の兵兒帶を後方で一寸結んだ、見るから痛々しい姿。自分は先づ、何うしたのだ、と宛然實の弟にでも對する口調で訊ねて見た、恐々とした件の少年は哀れ味をそふやうな眼光に自分を凝と打ち仰いで重々しく口唇を切る。

二言三言この可憐の少年と、情に脆い自分との間に繰返へされて、初めて自分は彼の身の上を知つたので、可哀想だなとの念はもう胸膈に一杯になつて來て、つく〴〵とこの落魄なる少年を見やつた。うすら寒い秋の風に冷たい雨は何と思つてこの罪もない少年に慘く降り散らすのか。肌寒いのであらう單衣姿の彼は、小さく固くなつて縁に顫へて居るのだ、見兼ねた自分は押入から襯衣を出して與へてやつた。彼は嬉しいのか將かなしいのか涙を流して泣くのであつた、おゝ、可憐なる少年よと自分も亦貰泣きをしたのである。

彼の身の上は斯ふである。少年、姓名を矢島某と謂つて、年は十三歳、信州の產だ、家は商を業として居た、幼ない折母親に捨てられた以來は父親の手に育てあげられて何うか斯うか學校にも通へ讀書も出來るやうになつた、所が前年の戰爭で當時后備役であつた少年の父は召集されて出て往かれたもの、不運にも敵彈に斃れて名譽の戰死をされた、跡に殘つたのはかの少年と少年の祖父母だけで親戚とてない彼等は淋しく月日を過して居た。然るに父が戰死のお蔭で當局からは例の特別下賜金があつた。まだ未丁年の彼に悉皆戶主の權利から總てを祖父母の手に依願して居たので現に今回の下賜金一件も祖父母に依頼んで、かれは少しも顧みなかつたのである。血を別けた親兄弟の間柄でも金錢上の事となると他人である。今數百金を手にした祖父母も孫である彼との間にもこの理に外れぬ悲劇が醸された。一度金錢を手にした祖父母は最早愛孫などは眼中に無かつた。無情！祖父母は遂に彼を唯一人置去りにして行方白波と消え失せた、少年の驚きは何うであつたらう。その悲しみは何うであつたか、自分は想像するだに涙が零れる。あゝ憎み憎みても尚ほ餘りあるはかの祖父母の行爲である。あゝ鬼か蛇か。天地孤獨の身となつた少年は無限の哀愁と無限の痛苦とを抱いて已に人手に賣渡されたと謂ふ。わが家を跡にして、さすらひの身となつた。あゝ依賴なき彼は何處に憂世の潮風を避けやうとするのか、彼は一人の伯母がある、今東京に住むで居るのだ。伯母なる人はわが母親の妹なれば慕い行けば――との希望に勇ましくも限りなき哀愁と痛苦とを打消して彼は人に敎へられし東京街道を辿り初めたのである、けれど彼は目指す東都に着かぬうち早くも心なき飢渴は彼を襲ふたのであつた。懷中には一錢半錢の貯へも無い。彼に於て彼は人の門邊に物を乞ふの身となつた。そして彼は地方の農家の軒下に立つた時は麥でも刈らして下さいと云ふ、憐れな人の子よ、彼はこの間の洪水の爲に東京に往くことさへ出來ず、途にわが地方へとさすらひ來たのであると、噫。

聽て彼は余の與へし襯衣を小脇にかい込みながら矢と樣をはなれた。自分は驅寄つてその掌にあるものを握らせて、この山向ふに大きな農家がある其家へ往つて依賴で見なと敎へて別れた。少年は丁寧に辭儀して出て往つた。

冷たい秋の雨は亦も強く蕭々と降て來た、あゝ彼も人の子であるのに!!。

（完）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

求妻の八景

菊地松堂

此夏事ありて故郷に歸りしに頻りに我に妻を娶れと勸む、甚しきは「あれに定めて置く」と谷中村ならぬに早く强制執行の勢なり、されど我には我の求むる妻あり、こを認めて娶らんとしたるが、福田女史が、それをとのとにより、こゝに公けにしつ、世の妻を求むる人、妻を勸むる人の參考にもなりなん、敢て「求婚廣告」にあらず

結婚は一大冒險事業なり、容易にやらかすものにあらず、されど案ずるより產むが安し、やつて見るとそう案じたるものにあらざるべし

我は此年二十九歲なり、來年は所謂而立の歲「海峰文集」に云はく男子十六より三十に至る以て人の父たるべし三十にして娶らざれば則ち已に老ゆと、こは支那人の云ふ所なれど之を二十世紀のハイカラ賢者に聞くに曰く男子の結婚最良時期は二十歲より三十五歲の間に在りと、然らば我れ既に結婚の時期に達したるなり、然も我は決して不具者にあらず、人の我に妻帶を勸むるは怪しむべきの事にあらず、我また之を執行すべき權利を有す、然るに直ちに「諾」と云はざるは何ぞや

我れ敢て敵打の大願を有するにあらず、窃かに約したる情人のあるにあらず、而して何故に躊躇するか、曰く貧棒と云ふものを有す、貧棒と云ふ棒は鐵棒も亂棒も到底及ぶべきにあらざる也、我に妻を勸むるは我を買ひ被ぶれるなり、我迷惑千萬也

世の僞善者は金無くして在りと思はるゝを喜ぶ、世の妻を求むる者は金無くして在りと云ふ、辨護にあらねども我れ廉を云ふてとは好まざる也、然も時に方便と云ふ、我は人生の一大事に向て虛を云ふほどの閒拔けにあらざるを悲しむ

ジヨン、スチユワード、ミルは曰く、妻は贅澤物なりと、是れ名言なり、人の只生きて居ると云ふ丈けには無くても足りなん、我は無妻也、然れども生存す、是れ論より證據にあらずや

或は云はん、貴樣の言の如くんば精神の妻無しと、然り精神の妻は無し、無きにあらず得難きなり、故に曰く堂より下さずと、今頃のハイカラ式部に果して精神の妻たるを熱望するものありや否や

我は天地間の一擔大なり、經に曰く慈眼視衆生、福壽海無量と、此意味に於て我は天下の大富豪なり、カーネギー蕎を食らへ、岩崎三井氏でも臭げ、然れどもこは財產目錄に載せ…るなり、愚かなる世や

結婚式は嫁に取りては無期徒刑の宣告なり妻と成るはなか〳〵考へものなり、その夫たるべき男を研究せざるべからず、然り大に研究せざるべからず、然れども猶は我に妻を勸む、其親切や感謝の外無きなり、而して猶ほ註文あり、九文の足袋は九文半の足には適まらず、足袋にして且つ然り、一生連れ添ふ女房ぢやもの、あに註文無かるべけんや、「求妻の八景」即ち是れ、

一、身體の强壯　無病は第一の利、陶朱の富も秦皇の位も無病には如かじ、身體が第一の寶也

二、血統の純潔　肺病、癲病、精神病の血統あるものは眞平御免なり

三、中等敎育　高等女學校卒業以上のもの、小學敎育だけでは役に足らず、されど敢て專門學の敎育必要と云ふにあらず

四、溫順の性質　お轉婆は御免、溫順貞淑なるを望む、女の性は柔を本とす、さりとてのろまなれと云ふにあらず

五、愛嬌の容貌　醜婦にては閉口、されど美人を望むにあらず、只容姿を主とす、美人でも貧相の淋びしげなるは嫌い、いつもにこ〳〵して居るを要す

六、主婦の素養　裁縫、炊事、洗布應對家庭經濟の素養あるもの、これ主婦たるの素養なれば也、雜巾掛も出來ず、お給仕も出來ざるハイカラは駄目也

七、高尙の氣品　愛嬌とて女郎や茶屋女の樣では不可、溫順とて馬鹿にされても平氣なるは落選、即ち高くして措き氣品を要す

八、家庭の覺悟　如何なる困難にも打ち勝つの覺悟あるもの、下女を使つて奧さん然たる生活を望むものは不可、人生は戰也、家庭は陣屋也の覺悟肝要

古語に曰く兒を敎ふるは嬰孩の時にあり、妻を戒むるは結婚の時にありと、猶ほ緩なり、妻を戒むるは妻たるを約する時に在りてんな我儘を云ふ氣狂でも「共に苦勞をして見たい」とのお茶人あらば御相談に應じ申さん

若し夫れ然らずんば無きに如かず、妻女誠是汝煩累のみ

旅行中の色々（一）

ひ　で

今まで份り覺へもせぬ腦の病いの日々に募り、捨て置けば終に醫すべからざるの悔ひあらんと醫師の注告に、最早や惜しからぬ吾が命とは思ひながら、まだ頑是なき小供の行末なぞ思ひ出でゝは、なんだか數ならぬ身も惜しき心地のせられて醫師の勸告に從ひ暫し萬事を抛ち靜養する事と致しましたが、勿論貧窮の吾れ、思ふ儘に何處に旅行するといふ目途もなきまゝ、郷里岡山に獨り嫁付ぎ居ます姉上の御許に久し振りの御役介懸けんものと、漸々に決心せしは晚夏凉風を送るの候にて候らひし。斯くと覺悟しては、最早や何事も手に添はず目を瞑りて萬障を排し飄然郷を後に、郷なる人の京都大學に在るを、先づ第一に訪問い、それより丹波の同志岩崎革也氏の新婚を賀すべく且つ其新夫人と交るべく同家に數日滯在、非常の優遇を辱ふし、小春日和の暖かさに夫人登美子女史と野菊や、犬蓼や、蘭草（サフランの如き京花なり）以て充塞されたる、程遠からぬ原野に遊びて自然の美に打たれ、アヽ仙境とは斯の如きの云ひならん吾れ此趣味を解せず再三再四の謎を何ぼ悟りすまに然う闘爭雜の境に奮闘的生活を繼續せんとする馬鹿らしさよと、嘲けつて大いに詩人を氣取つても見たり、亦翻つて、咄、徒らに文學の人となり、冥想の人となり、己れを深ふして獨りを樂しみ、他を顧りみざる我利主義こそ、吾が敵なれ、見よ現代は此天賦の仙境をも或一部の占有に歸せしめ衆庶の觀覽遊樂を許さゞるとは何たる偏頗の處置なる乎と、亦してもや固有の不平はムラ〳〵と持ち上り、登美子夫人と歡敍刻に及べりし。

同女史は京都市高等女學校に十七年間勤續せられし名譽ある敎諭なりしも今春岩崎家に入嫁せられ、三十六歲の初婚は特に兩君の間をして實證夢譚かに膠漆啻ならざらしむ、謹んで友白髮の萬々歲を祝し申さん。

岩崎家を辭して大阪なる友人の家に寓す、由來、大阪は吾にとり思ひ出多き土地なれば早々通過して、目的地なる岡山へと思ひしに、何處よりか洩れけん、大坂同事犯者たる當景山英子、今は世界婦人雜誌主幹として當市にあり、こは金儲けの蔭にありつきたりと、吾を居敢女、花井お梅同樣に見世物として一興行せんとの恐ろしき陰謀は早くも彼等興行師といふ連中に依つて計畫せられしなり、何も知らぬが佛の吾は、一友人の家に寓して濟ましたものなり、興行師の連中は曰く果して景山乎、大坂事件の彼は旅館も選擇して榮華を誇りたりしに如何に友人とはいへ狹隘なる貧弱の友の内に宿泊せるとは奇怪なり、先づ其實否なるや僞物なるやを、たしかめたしとて、訪問はれしも、おかしからず哉、興行師先生はピカ〳〵したる糸織の着物に同じき品の羽織を着し右の指に風呂桶の框的金指環を嵌め、齒も金にてピカつかせ帯にも金の太き鎖は巻きつけられ、全身光るものづくめにて、黃金光燦爛人目を眩するが、其人の本職ならんが、吾が貧乏たらしき風采に接して疑惑の念は益々深く、何處やら落付かぬ風にて一通りの挨拶は濟みしも、吾は彼の容貌を一目見るや、ムカ〳〵と固有の癖は起り來りて、彼が大阪事件當時の有樣を縷々說し出すも吾は一向興に乘らず五月蠅げにもてなす事の彼には僞物と映じけん何んとかお茶を濁して歸り去れり。因にいふ興行師たりし中は談判破裂の後に諒解せしにて最初吾を訪問の時は土地の有志者としての紹介にてありし。

さても憂はしの世には候はずや、吾が成功熱に浮かれて爛漫に誇りし當時の青春時代と幼少內觀的の思想に移りし今日の吾を目して僞物なりといふ、若し僞物に非れば、今より當市第一の旅館に轉じ綺羅を飾り侍女も聘せざるべからずといふ（然らざれば見世物にならずといふの意思ならん）、爰に至りて吾は怒り心頭より發し友人には氣の毒なりしも、抑も吾を何とか思ふ、曲解も亦甚だしきに非ずや、今日の吾は[illegible]やしみ虛僞を惡みて、數千年來の惡習慣、道義德と奮闘するにあり、何ぞ現世に阿り不義者の傀儡となりて泡沫の如き榮華を希はんやと、遂に斷然拒絶して友人の家を去り岡山なる姉君の家に至りぬ。（未完）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

短篇小説

親友

増田操

鏡の如く澄み渡りし空には高く十五夜の月は圓形く下界を隈なく照らして居る。兎角萬事意にならぬは浮世なりとか、さればにこそ月に叢雲花には嵐とか云ふなり。今や漸く月の半面は黒雲におほはれたり。本郷の大横町を足を早めて行く一個の學生風の男子はあり。年齢の頃は二十の上を三四も越へしか瘦せぎすの背はすらりと高く稍々長き顔の色飽くまで白く目は涼しく大き過ぎる程の活乎とした二重瞼、鼻はツンと格恰よく高く、口元はキッと締つて學生には惜しい様な凛然とした好男子、然れど何處やらにうら淋しく憂苦の色は顔面に現はれて居る。身には幾度か洗濯屋の手に掛つた様な紺飛白の單衣に誰が丹精せしものか處々の傷處に鋏の糸目も細かく手際よくつくらひし紺飛白の丈長き給羽織を着し左手に細き手製らしき洋杖、右手に洋綴の書籍一冊を持ち、ツト立ち止まつて四方を忙はしく見廻して又さつさと歩み出しぬ。軈てある牛乳屋の前に立ちて一寸内を透し見て躊躇もなく「のーれん」を潜つてとつかと椅子に腰を下ろせり。向側には三十七八歳の紳士は悠々然と葉巻を喫しつゝ新聞を讀み居りしが静かに眼鏡越しに書生を眺め又一心に新聞を眺め始めぬ。彼の書生は「オイ牛乳呉れんか、それから二三日前からの官報を」と命した小女は盆の上に牛乳瓶に鉢を添へて差出し棚の上より四輯り程にせる官報を下ろして書生の前に置いた、書生は無言のまゝ引寄せて頻りに紙をひるがへし慌はしげに眺めつゝ牛乳瓶の口よりグイと一口に飲み乾して指尖でチョイと一枚ひるがへした、渠の目は異様に輝やきて醫術開業後期試驗合格人名表と云ふ欄に目を注いだ、約三分間程にして渠は非常に落膽の様にて「不合格」「ヤ失敗」と叫んだ又官報に目を注いで「エ彼奴にやられたかチエ殘念だ」と再び叫んで椅子を離れた、渠は非常にのぼせたと見え蒼白い顔面見る／＼紅潮して燃へ立つ様な紅色を現はしぬ。目は血走つて怒い肩はキリ／＼と釣り上り拳を握り全身ブル／＼と打ち顫ふて恨めしげに官報を睨め付けたり、小女は懼気に酒の方に寄りて小さくなつて渠を眺めぬ、渠は漸く吾れに歸りし如くあたりを静かに見廻したり、其時はもふ紅色去りて常よりも層一層蒼白く兩肩の間には言ふべからざる苦悶の小襞は刻まれた、渠は幾度か太息を吐いて喫忍せしが懐中さぐり銀貨入れより白銅一個摘み出して茫然と牛乳屋を出た、天を仰げは煌々たる明月は高く澄み渡り赫々たる星は燦爛として一面にありぬ、渠は不覺立ち止り又もや慷慨悲憤、拳を握り眼よりは熱き涙溶鐵の如き血涙は墜れ己が心の冷たき事氷雪の如く血は死し全身痿えて殆んど脈搏を止むる時、只々涙の止むる由なくヘラ／＼と頬に傳はれり、渠は流るゝ涙拭ひも敢ず頭垂れ腕拱ぬきて天に訴へ地に哭し慨歎に沈む稍々久し、渠は虹の如き太息を吻と吐き、吁悲しい哉我れは何故こふ不運なるか多年あらゆる艱難辛苦を嘗め盡し功遂げて故郷に歸り老ひたる母を安めんと樂しくいさみて學ひし甲斐もなく消へて影なき水泡に歸したり吁時つて詮なき事ながらよも／＼落第するとは夢にも感想はざりき、母上聞かば如何許り歎きつらん、定めて今頃は一人淋しく我が首尾如何にと待つらんに、吁殘念だ寧ろ此身が恨めしいと果てしは男が頭の毛を掻き挘しり齒をくひしばりて男泣きに泣いた、折しも輕く我肩を叩くものありふり返れば親密の友人笹山の君の微笑を含みて立てるなり 笹「杉野君何を茫然として考へ込んで居るのか何か心配事でもあるのか」と氣づかはしげに顔差し覗けば彼はふり返りて無言のまゝ笹山の手首を握り、天を仰ぎて玉なす涙に閉ぢたる兩眼より湧き出づるなり笹山は不審かしげに 笹「オイ君、杉野君一體どうした、何をそんなに心配するのか」渠は流るゝ涙振り拂ひ沈みし聲に力を込めて 杉「實は君僕は君に對して面目ない……試驗の結果不首尾であつた」言ひ放ちて又今更の如く深き感慨に沈みぬ、笹山もヘッと驚き不思一歩進みて 笹「エ君異個試驗は無功かつたのか、ソリャ殘念な事だなア、まつたく試驗と言ふものは運だからナア併し君失敗は成功の基といふ事もあるからソウ落膽し給ふナ、此次巧くやり給へ此度は乾度大丈夫だからそ、君、兎も角僕の下宿まで行かうか」と慰ろに慰藉むれば杉野は「有り難ふ併、君、僕は今熟々と考へた、もふ事そ死んで終ふ」と、笹山は言葉を遮り目には一杯の涙をためて 笹「君、そんな無分別な事があるものか、日頃の君にも似合はない、ソリヤ君殘念だろふ誰しも同じ事だから察しるよ、併し君、一度の失敗でそんな弱い事を云つてた日にやア君、四度五度も失敗する者はどふだ、隨分君、引續き失敗やる奴もあるからナア、君なんかは今始めてじやないか、そふ落膽し給ふな、又君失敗したから死ぬなんて事はあるものか、君が既に死る所なれど諺に曰く豹は死して皮を留め人は死して名を留むとあるではないか君が今目的成功せず一時に落膽の餘り死せし曉は世人君をして嗤なげかはしき狂男、落第し其上老母を見捨て丶犬死したと一齊に嘲笑冷罵してやまず、すれば甘受けで濟むべき侮辱の上塗りして畢竟自ら進んで落第を世間に披露するやふなものではないか此處は一つ君よつく考へて呉れ、決して無分別な事をしてはいけないよ」と悄然として聞き居し杉野は 杉「イヤ笹山君、今理を解いての御言葉僕は、もふしみ／＼と身に染みた、併し君、僕は一人の母は食ふや食はずに僕の一日も早く醫師となるのを待つて居るのではないか、其僕の母はね老體も厭はず夜も殆んど寐ない位に内職して此不甲斐ない僕に毎月必ず一圓五十錢以上二圓以下の金子を送り來るのだよ、命は君僅かであるが、あの老體で食ふものもろく／＼食はないで上にそれ丈の金錢を儲けるといふのは、並大抵の事でないだろふと思ふのだ、此の悲しき境界に不幸にして落第し猶此上母上に此る苦しみを掛けるかと思ふと全く僕の胸裡は張り裂けるやふだよ」笹山は眼をしばたゝき「其處だよ君、其邊はしい母上を殘して死なれるものかね、よつく考へ給へ、そこで君僕ぞて餘話のある學資ではないが以後こふしよふ、僕は明日から君の處へ同居しよふ、極常識を取れば食ふ丈けは僕の下宿料であるかも知れないし君空間は一緒勵して會社へでも務めて夜は一生懸命に勉強するのだ君時と場合ではお互に勞働をしても換ます勵乜して此次の期をはずさず天晴醫師と成つて母御に安心させ給へ」と赤心面に表はれて且慰め且諫めければ杉野は湧き出づる涙拭ひもせず、君の親切骨髄に徹し返す言葉はない、唯何胸にしみ渡りて萬無量に感じるよ、君僕は假令死んでも忘却はせん併し君には氣の毒だナア」といと嬉しげに笹山の顔しみ／＼と見れば、笹山はうるみし目に微笑を含み「君氣の毒とは辭に云ふ事だ五年の昔義兄弟たらんと契ひし事を忘れしか、君は僕の爲には只一人の弟ではないかそんな水々しき言を云はず互に續け得る限りは助け合ふて成功の曉を待たふじやないか」「君僕はうれしい以後如何なる苦勞をしても來年は乾度免狀を握つて、君の心に報酬いるから安心して呉れ給へ」笹山は飛び立つばかりにこをどりしてよろこび 笹「君も實の兄弟と思ふて互に勉励しよふ、ヂや君僕は明日の朝から君の處へ行くがかまはんだろふ」杉「かまふも、かまはぬもあるものかね、僕はうれしいけれど、君實際すまないナア併二疊半では狭かないだろふか」笹「大丈夫起きて半疊寐て一疊だ、それでは君僕はわす行くにすれば今晩下宿の方に色々要もあるから此處から失敬するよ、君決して無分別な事を思ひ起してはいけないよ」と立ち別るゝ今迄も杉野を思ふ心根の殊とくも又やさしけれ。（未完）

「友なる乙女に」の一節

淡水

……主義主張のために、捧げたる身とは申せと恥しや、はかなき想ひにつかれ果てけり、うつし世の執着はのかや、我生の寂寥に得堪えず、秘かに過ぎ來し方を顧ればありて甲斐なき生命なりき、覔かりける人を初冬、木枯らし荒ぶ、人生の悲愁に泣きて身も魂もわらせず」とは痛ましき御言葉にこそ、いづれ浮世は甲斐なきものに候、人のさだめは[illegible]にぞ、さあれ御身は何とでかくは悲しき事申えまつるぞ御身に添ひて[illegible]申し聞かせ給へ、[illegible]ける甲斐だにあらば足れるなれ、[illegible]しみ性と世にいたはしき[illegible]にのみ動くは女の常、まして[illegible]きみの、我生の寂寥に得堪へずとは、いかばかり御心煩ひ給ふかを察し[illegible]らず、さればとて由なき事に思ひ惑ひ給ふな、人の身のさだめをも顧み給へ、[illegible]醉ひくれてこそ渡り給へ、神のみ恋に溺れて、其のみ力を頼みて、人生の光りを受け給へ、感謝する所に生命と、活動とありなん……

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

石川三四郎氏より

長き夜の明け暮れ物思ひ、此頃は又格別に候、窓前の樹葉凋落して頻々しく地を打ち候を聞きては秋の名残も身にしみ／＼と惜まれ候△此頃は御老母御同居にて御賑やかの事と察上候、御老母が火鉢の傍に居眠りつゝ姉様をふかし給ふ様眼に見る如くに候△世界婦人の近況如何、何事も修養の為にて勉め給はゞ過ちは有るまじく候、持てるものは持たぬものをも得べしとの事に候△是迄は度々御差入下され、幸に不便なる獄中生活にも不便を感ずる事無之偶に御身の悶に候、併し之より後は獄日に近し、當所まで御出の御苦労は容易の事に非ず、何卒一ケ月一回位に御止め下され度候△小弟此頃世間の事、我が身の事など思ふに付け是迄好まざりし「肉の事を思ふは死也」てふ保羅の一言が、ヒシ／＼と胸に答へ申候、人生は真に霊と肉との戦ひに候、悲惨極まるに候、此悲惨を脱せんとする活動が宗教に候、社会主義も亦た之より起り候、此點に於て宗教は革命的に候、社会主義や無政府主義は何しき改良主義に候△此頃かのクエカー教のアン、リーといふ婦人が北米に建設せし共産村の事を読み、羨ましく感ぜられ候、社会主義者が巧みに組織せし数々の共産村が失敗せしに係らず、信仰の結合になりし此の共産村が皆な成功して今に栄ゆるを見ては奇妙な感も起り候、北海道の小生の友人なども何とか甘く行かぬものにや候△又た此頃シカゴストライキの記事を読み血を沸かし候、深厚熱烈なる筈の何逆の資本家の賄賂運動の犠牲となりて、某の某と消え候様、悲壮の極に候、某者のパルソンと言へる人の未亡人は亡夫の志を継ぎ北米大陸を遍遊して奮闘しき由より無政府主義を宣伝するの一項に及ぶや、思はず涙に咽び候△安部さんの聖書講義は非常々々御願ひする様姉様の御盡力下され度候、別に広き考證等を要せず一通りの御講話が却て有益かと存じ候、聖書は智識にて講義すべきものに非ず、人格にて講義すべきものと存候△田中翁より幾度も病気見舞を受け恐縮に候、目下頗る健全なれば御安心願上候△西川夫人より度々御慰問賜はり御序に宜しく御願上候、併し時々ヒヤカして来り候、出獄の上は深山御馳走さるゝ由にて仇討致すべく候、先日は又新戸部博士の随想録御送附下され感謝上候へ、此頃中救世軍の添田君二度まで御出で下され候いしが、面会の時間にて心残り候為め能く御話を承はらず、返す／＼も残念に候△遊見家には別に御変り無く候や、此頃は定めし商売繁昌の御様子、深山御儲けの上吾々の方へも分配を多くする様に願上候、（福田英宛）

拝啓　人並にふすまを持たぬ方々へ同情すべき候と相成女史の御心中と小生等の腑甲斐なきとに対比して慚愧罷在候、作去愈々貴社隆昌の由主義のため慶賀致し居候、小生事も四五日前此宅作り本日貴誌拝見御新聞のを一層うしろのたく存じ候、御彩々中「新婦人の教訓」などは細微の末に主義に深厚なる御主張論樹の御論説敬服の外無之候、何卒／＼此の穎脱的の御筆鋒をもて益々おちらぬ事を望む次第に候は右のみ。別に些少なれど志料にも御使ひ被下度願上候、乱文御許し御免。（小岡如雨氏より）

●木下尚江氏より　拝啓　時下益々御清栄奉賀候、平素は御無沙汰に御海容被下度候、小生事も永々山居罷在候いしが来月は早々帰京致す考に有之近々拝顔の機可申述候早々。十一月廿六日

●九州評論社より　世界婦人拾九號正に拝見、殊に第一回の御提唱、断如として婦人本来の面目を見る、由来絶對自由を主義とし本領とし性命として主張する我党、今貴姉の意気精神を劈頭して淋漓敬慕の情に堪へず、嬉しさのあまり黙するに忍びず謹んで一筆呈します。

●内山愚童氏より　先月九日出京して親しく同志の高見を伺ひました、其節姉子をも御訪ひ申して御抱負を伺はんと豫期して居りましたが不幸御歸省中との事で失望いたしました、新紙の報ずる處によれば已に御歸京後は士来の御運動との由大いに御祝ひいたします。今や吾が幽谷は革命の血をもて全山を染めつゝある吾人の意気は此天がなせる秋景を見て、段一段の高潮となります然るに京濱間の紳士なる者は此血潮の枝をば手に任せて折りつゝ行しを見ては吾人同志の事業もかくして彼等に手折らるゝかの感なきを得ません。實にや秋は偉大なる教訓を天が与ふる者と感じました。

●田中翁より　只此冬は如何して凌ぎ得るか假小屋の寒さ今正に堪へがたし、大困難に候。（十一月二十六日）

●辛島千代子氏より　東京出発の際は態々御見送りいたゞき恐入りました。大阪、富山、又大阪から船にのり六日此地につきまして入港して居ります、人間は質朴ですが客人物質に進歩した人が多う御座います、皆様によろしく願ます。（十一月八日）

●担愛子氏より　其後先生には御障りないかゞの御様子に御座候御手紙差出したく存じ候へとも先日来より東京に出て日々に忙しく相なり主義以外の俗事の出入さへ扱ひ目なしらべられ候次第にて何事も心に任せず失礼いたし居り候今日平民新聞に一世界婦人いうださ拝見いたし御発行の日たのしみ待ち居り候さて私事いろ／＼と先生の御教へなど思ひ合せ考へにし未だ一事思ふ事も出来ず従来思ひし節も之あり候も、不本意ながらも何ヶ年間は此無趣味極まる資本家の内に束縛を覚悟して只々主義研究人格修養を専一に心がけ傍ら出来得る限り小冊子新聞の配布につくさんと存じ居り候就ては先日世界婦人九號二十五部いたゞき同地の女学校の最上級生の中にて名高き人の許又は女学校、寄宿等に頒て送付いたし候ところ学生の方には大に喜み之あり候間今少し続きて御送附を願ひ學生一同とまではゆかずとも数の人に配布いたしたらばいかゞならんと存じ居り候

◎社告（二）

▲今号は種々の障碍に困りて一日遅れを刊行致しました、諸君に御迷惑ない事ですが、何分にも微力の為め、評を申せば何かと愚痴や泣言が出ますから、只今は謹んで御詫びのみ致し置きまするどうぞ御許し下さい、其代り今月は死力を振ひ起して、来年一月發行の分を十月末に発行する事に致し、聊か発行一週間の遅延を償ふ積りです、就きましては、新號以来玉稿を投ぜられたる名士に悉く次号に依頼致し既に木下尚江氏にも承諾を得ればば久し振にて諸君と共に熱い血潮の文字に接するを得て楽しんで居ります、一月以降は何とか誌面を刷新して専心従事したいと思ひます、幸い皆々様の如く御同情を願ります

（二）

▲今回の二十號にて前金切れの御方に、何卒至急前金御郵送を願ひます、實に毎度申しもお恥かしいのですから、吾々の微衷を汲み玉はゞ此際御郵送を願ひ上げます

（三）

▲皆さんも御承知の谷中村ですね、あの破壊當時の悲惨極まる状は諸新聞紙上に鳴り承知でしやう、あの當時は随分八ケ釜しく喧したてこれら此の谷中問題を不問に附すやうになると、附近に住する人々にも喚々せられたれ、先輩者に依りて彼の谷中問題は遥かに解決せる事と、愚かには安心して居りました、然るに本紙に田中翁の書信中にもある如く、谷中に住める村民は無情なる政府の暴虐に抗して今や瀕死に瀕せんとして、田中翁、目下病臥せられて亦谷中人士を見ざるなし、去る頃日の新紀元は經營困難にて廃刊せられし木下兄も終に亦東都の人となりて、久し振りに會合せられ新紀元社同人は石川兄を除き皆来集せられければ、逸見兄の発言によりて谷中村慰問の議間で、同志に賛して来る十九日（木曜日）の午前七時半を期し上野停車場より發途して谷中村を訪づれ、思ひ／＼の見舞物を持参する事に決しました

ア、皆さん、此頃の寒さは如何でしやう。隙き間漏る風に吾等は寝床を忍へるではありませんか、皆さん、中の人々は網代の屋根に一枚の板を囲ふ一穴の小屋よりも御住居き小屋の中に寝起し労働して居るのですよ、血あり涙あるもの如何んぞ一掬同情の涙なからんやです、當日は新紀元社同人の打揃ひ阿部、木下、逸見、石川の諸氏及び吾々も同行致します、發起者の内に一昔し御経験なら、何卒に就いて、大なる人生の経験を倫理道徳の経済を萬巻讀むよりも、より大なる活教訓を得玉はん、若し古備付、古物、古衣子何にても身に纏ふて寒さを凌ぎ得らるゝものあらば、御與たれ當日持参すべし）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

日本一の料理書出づ

好評

宮内省大膳職庖士 赤堀吉松
日本女子大學教授 東京女學館教授 赤堀峯吉 赤堀菊子 合著

日本料理法

定價七十錢 郵税八錢 但郵券代用一割増

絶世の珍本

◎我料理界の絶倫 赤堀家三先生が大の苦心に成る 眞に是古今獨歩
◎同家累代の秘傳を悉く發表 最も手近の材料を以て最美味の調理を教へ廣く一般家庭に適す
◎料理方法五百種餘 四季野菜肉類海草魚貝乾物一切網羅し圖解入説明完全無缺

「弦齋夫人の料理談」 石塚月亭君編 價六拾錢 郵税八錢 一月より十二月に至る季節料理
「家庭菓子製法」 菓君著 價五拾錢 郵税六錢 累代の菓子製造家梅田矯二君の百餘種の和菓子製法を親切説明

東京京橋南紺屋町 實業之日本社 賣捌各地

德田秋聲著 (上製美本)

近刊 小説

母の血

定價七拾錢 郵税拾錢

此篇題して「母の血」と云ふ。抑も如何なる母の血をか享けたる。汚血か、毒血か、將た惡血か。著者の靈筆に描出されたる幾樣の人物と共に此の一大雄篇は成れり。秋聲子が一年有餘の苦心に成たる新作は是なり。

發行所 本郷區天神町二丁目二拾五番地 日高有倫堂

時代の要求により生れたるカメリヤは色白くきめを細かに艶を増し肌を滑かならしむる最新最良の洗粉なり年若き方々のみならず老年の肌には殊に効驗著し

定價 大瓶廿五錢 瓶入十二錢 袋入五錢 小袋三錢

本舗 ライオン歯磨發賣元 東京神田柳原川岸 小林富次郎

森近運平、堺利彦、共著

社會主義綱要

(最新刊)

定價四十錢 郵税八錢

目次 第一章、社會の經濟的基礎▲第二章、生產方法の變遷▲第三章、現代經濟論▲第四章、社會主義主張▲第五章、社會主義と農業▲第六章、社會主義と婦人▲第七章、社會主義と富者、附中等社會▲第八章、社會主義と國際戰爭▲第九章、社會主義の反對論▲第拾章、社會主義略史、▲第拾一章、社會主義の現狀

ベークマン著 「新佛教」記者 杉村縱橫譯補

改訂増補 强肺術

定價四拾錢 郵税四錢

肺病を恐るゝ者は讀め、肺病に罹れる者は讀め、歐米に於る最新式體力養成法を讀め。第一、時間を要せざること。第二、費用を要せざること。第三、場所を要せざること。第四、勞力を要せざること。第五、言文一致體なること。第六、總振假名付なること。故に誰にも容易に理解し容易に實行し而して確實にその功果を收め得べし。

發行所 東京市小石川區原町六番地 鷄聲堂 (振替口座一三五三番)
取次所 東京 由分社 大坂 平民社

齒科治療 自午前八時 至午後十時

吉瀨齒科醫院

院主 吉瀨才市郎

東京神田須田町二十六番地 (萬世橋内右横町)

●藥價手術料共半額
●貧困者施療

腦病、脊髓病 神經病、精神病 專門治療

土地高燥 閑靜 電氣治療 マッサージ治療

東京田端 田端停車場西二丁

東京腦病院

電話下谷三三〇一

院長 後藤省吾

本月

十日 十一日 十二日 十三日 十四日 十五日 十六日 十七日 十八日 十九日 二十日 廿一日 廿二日 廿三日 廿四日 廿五日 廿六日 廿七日 廿八日 廿九日 三十日

●第一等三越呉服切手金五拾圓宛三十枚

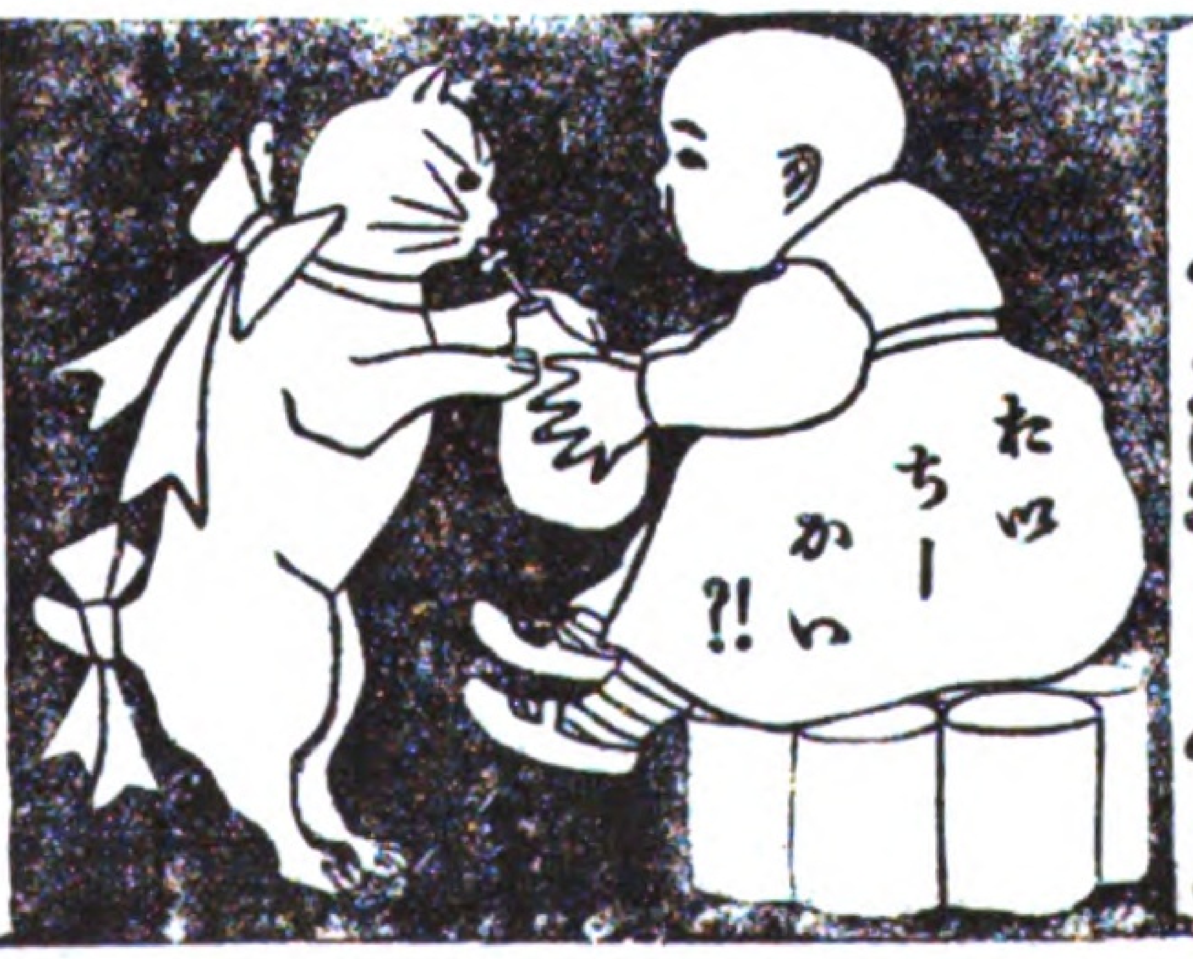
●第一等天賞堂商品切手金拾圓宛三十枚

天賞堂 歳晩大賣出し

本店 神田 横濱

●福引景品 第一種一等 三越呉服切手金五拾圓 (一本もカラクジなし景品割合は別項記載の通り)

●福引景品 第二種一等 天賞堂商品切手金拾圓 (一本もカラクジなし景品割合は別項記載の通り)



伊豆三島 花島煉乳場製 名譽ある

金鷄ミルク

發賣元 東京市日本橋區大傳馬町 逸見山陽堂 (電話浪花二一五一番 振替貯金口座三二九六番)

◎定價 △一部四錢五厘、十部四十二錢、二十部八十錢 △申込は總て前金の事、△郵税當方持

編輯兼發行人 東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地 神崎順一
印刷人 東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地 遠藤友四郎
發行所 東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地 世界婦人社
印刷所 東京神田區豐島町卅四番地 博興堂

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY